

# 感じる漢字 + 立音楽会



まっくら森林の

記録集

令和4年度アートによる新生まっくら森林事業  
アートで広げる子どもの未来プロジェクト  
福島芸術計画 2022

# 感じる漢字

令和4年度 アートによる新生ふくしま交流事業  
アートで広げる子どもの未来プロジェクト  
福島芸術計画 **2022**

アートで広げる子どもの未来プロジェクトは  
福島の未来を担う子どもたちに、将来「新生ふくしま」  
を推進する人材として活躍してもらうため、多彩なア  
ートプログラムを体験できるワークショップを実施するこ  
とで心豊かな成長を支援します。

福島県立会津支援学校高等部 2、3 年生、中学部  
1、2 年生、小学部 5 年生が、花や香り、絵画や  
窓の外の景色など室礼（しつらい）の中で文化  
や自然を感じ、その姿をあらわす漢字を墨で記  
しました。講師の書道家・千葉清藍さんと漢字  
の面白さ、墨で紙に書く質感を楽しみました。

## 「感じる漢字」と墨時間

「香」の薫りに包まれた生活訓練室。窓に広がる「山」や「雲」と床の間の「絵」「花」「石」。

ワークショップ「感じる漢字」は、風景や生活の中にある「モノ」と「漢字」を照らし合わせて、一人一人が書きたい漢字を選びました。書体は、漢字の成り立ちが感じられ、印鑑などにも用いられている「篆書体（てんしょたい）」です。

墨をすり、筆を使って書くことは、自分自身と向き合う行為です。「とめ・はね・はらい」や書き順などに捉われない「描く（かく）」と「書く（かく）」。漢字の魅力を皆が存分に楽しみ、一枚、もう一枚！を繰り返した空間は、楽しくも真剣さに満ちた、豊かな墨の香りへと変化していました。墨の濃淡に耳を澄ませ、「感じる漢字」を皆様にも体感していただけたら嬉しいです。

千葉 清藍



## 千葉清藍 ちば せいらん

旅する書道家。2010年5月から福島県全59市町村を巡る“書道の旅”をはじめ、東日本大震災を経て、2011年11月達成。2013年1月、福島県の「あったかふくしま観光交流大使」に就任。現在は日本各地の書と文化に触れる「にっぽん書道の旅」を進行しながら、2013年よりアメリカの教育機関やイベントにて活動中。



## ワークショップ「感じる漢字」で感じたこと

川延 安直（福島県立博物館）

会津支援学校と福島県立博物館の細いつながりやを太くしっかりしたものにして、始まった連携・協働の試みはここ数年で大きな成果を上げています。支援学校と博物館の間には強い結びつきができました。

そのための中心的事業が「アートによる新生ふくしま交流事業 アートで広げる子どもの未来プロジェクト」福島芸術計画です。福島県、NPO 法人ドリームサポート福島と共に実施してきた本事業、今年度は書道家の千葉清藍さん、音楽家のシーナアキコさんをお招きし、それぞれ「感じる漢字」、「まっくら森の音楽会」と題したワークショップを行いました。

「あったかふくしま観光交流大使」も務めておられる千葉清藍さんは博物館が関わったさまざまな事業にこれまでもたびたびご協力くださっています。事前の支援学校の先生方との相談の中で書道に関する内容をとのご希望があり、今回もまた清藍さんに白羽の矢を立てさせていただきました。

さて、事業の内容をどうするか。相談の結果、上手な書写、書き順などの指導は先生にお任せし、文字、筆、墨、紙の味わいを楽しみ、感じる時間にしようということになりました。ワークショップ名は「感じる漢字」。

会場も教室の机ではなく、校内のフローリングと畳敷きの広い部屋を選びました。窓からは空、雲、木々を見つめることもできます。当日、床の間には水墨画の掛軸を掛け、部屋の片隅には盆石と菊の花を飾り、生徒さんを待ちました。そこからもうワークショップは始まっているのです。



まずは墨を磨ります。ほとんどの子は早く書きたいためか、濃くなる前に磨るのをやめてしまいます。そのため書き上がった作品は、ほとんどが滲み、薄くなっています。でも、それでいいんです。それがいいんです。紙と筆の感触を味わってもらいたいと、清藍さんはあえて半紙の裏を使うよう指導しました。そのためになお滲みの強くなった作品は、とても柔く優しい感じの漢字に書きあがりました。

お手本に選んだ字は篆書体です。象形文字だった漢字の原点を残す書体は流麗というよりは構築的で造形的な魅力がある。とめやはらい、書き順などはあまり関係ありません。以前に三島町の小学校で清藍さんに行ったワークショップでも篆書体を選びました。その時の生徒さんたちも時間を忘れて何枚も書いていました。意味を伝える記号としての文字とは異なり、篆書体は造形的にとっても魅力的です。そこに子どもたちはしっかり気づいていたのでしょう。それは支援学校の生徒さんたちも変わりません。興が乗ってくると、自分の名前を書いたり、お手本ではない何かを書いてみたり。家庭訪問学級の子、車椅子を使用している子にもできる範囲で参加してもらいました。

書き上がった作品を並べてみます。どの字もどの字も魅力的。ワークショップを楽しんでもらえた実感が湧きました。床に並べるのではなく、壁から壁に張り渡した紐に作品を

吊り下げました。万国旗のように子どもたちの世界が広がります。清藍さんと一緒に鑑賞。自分の作品、他の子の作品が生徒さんたちにはどのように見えたでしょうか。

後日、福島県立博物館で成果展を開催しました。そこでも吊り下げる展示を再現。ご家族でご来館くださった方もいらっしゃいました。一般の来館者にも会津支援学校と福島県立博物館のつながりを知っていただける機会になりました。すべての子どもたちの未来を広げるという目標に向かって小さな一歩を重ねていますが、まだまだやれることは山積みです。

参加してくれた生徒さん、千葉清藍さん、会津支援学校の先生方、その他お力をお貸しくださったみなさま本当にありがとうございました。





感じる漢字 1

.....

11月29日 火曜日

高等部3年生 国語科 受講生、2年生

福島県立会津支援学校 生活訓練室、高等部2・3年1組教室

講師 千葉 清藍（書道家）





書道家の千葉清藍さんを講師にお招きして、高等部3年国語科の授業でワークショップを実施しました。生活訓練室に入ると、「書」の雰囲気を感じることができ、また清藍さんの衣装を見た時に、生徒達の表情は一気に変わりました。書で使用する道具や文字の成り立ちについての説明を聞き、それぞれに筆を走らせて作品を書き上げました。生徒達は、手本を見ながら真剣な表情で書き上げ、一つ一つの作品を清

藍さんはじめ、博物館の職員、教員に見せて回る姿もあり、とても楽しく参加することができました。普段の授業では味わうことができない雰囲気、体験をさせていただいたこと生徒達にとって貴重な体験をすることができました。スタッフの皆様、ありがとうございました。

高等部 佐久間 恵美



今回の「書のワークショップ」では、欠席の生徒もいたため当日は1名の生徒と千葉清藍先生とでじっくりかかわっていただきました。肢体不自由があるため、事前の打ち合わせで、動かしやすい手の角度や筆の太さ、本人が見やすいような工夫を相談し当日を迎えました。生徒は、とても意欲的

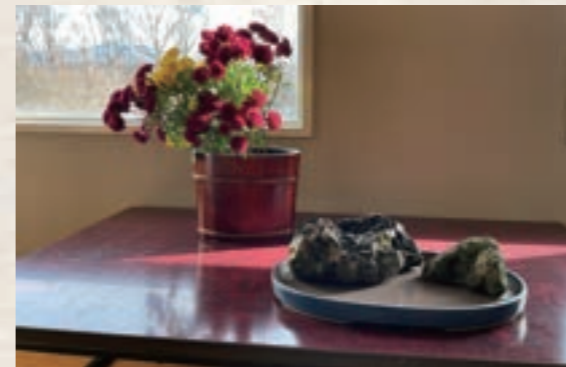
に口を動かして清藍先生とコミュニケーションを取りながら「花」という文字を書くことができました。ありがとうございました。

高等部2・3年1組 馬場 由佳子



感じる漢字 2

.....  
11月30日 水曜日  
中学部1・2年生  
福島県立会津支援学校 生活訓練室  
講師 千葉 清藍







日本の伝統である「書道」を、書道家の千葉清藍先生にご指導いただけるということで、大きな期待感をもって中学部からは2年3組、1年4組の生徒計9名、教師4名が参加させていただきました。

会場となった生活訓練室は、お香が焚かれ、掛軸や生け花など「和の雰囲気」を醸し出す品々が飾られるなど、もはや別世界でした。「筆順は、気にしなくて全然大丈夫です。」「書きたいように自由に書きましょう。」との清藍先生のお話に、生徒たちは肩ひじを張ることなく、リラックスすることができました。また、漢字の成り立ちについて「石」や「花」、「雲」など目の前の事物と照らし合わせて教わったり、墨を自分ですったり、篆書で自分の名前を書いたり、朱肉を付けて印を押したりと、初めて体験することばかりで、日常の学校生活では決して味わうことができないいへん貴重な体験をさせていただきました。

活動の終わりに、自分たちの作品の前で清藍先生と一緒に撮った集合写真に写し出された一人ひとりの表情に、手ごたえのある満足感がしっかりと表れていました。この度は、たいへんお世話になりました。本当にありがとうございました。

中学部 柳沼 亨廣





感じる漢字 3

.....  
11月30日 水曜日  
小学部5年生  
福島県立会津支援学校 生活訓練室  
講師 千葉 清藍







前年度に参加した赤べこ大行進のワークショップで「本物」のすごさを実感しました。学校だけでは得られない貴重な時間を子どもたちにまた経験させてあげたいと思い、今回の書のワークショップに参加させていただきました。じっとしていることが難しい子どもたちで、座卓の前に腰かけて薄い紙や墨を前にしてちゃんと活動することができるだろうか・・・正直、不安もありました。でも、実際に参加してみると、子どもたちは心地よいお香の香りや、さり気なく飾られている花、着物姿の先生に夢中に

なっていました。墨をすって、筆をゆっくり動かしてみる子どもたちの顔は真剣そのもの。自分が書いた文字が飾られると、手をたたいて喜んでいました。その後、学級でも年賀状や節分飾りに墨をすって書く活動を取り入れてみました。それぞれの味のある作品が出来上がりました。子どもたちのいろいろな表現の可能性を感じました。スタッフの皆様、ありがとうございました。

小学部 林 裕子



地域連携の担当者として、書や音楽のワークショップに携わる中で、最も印象的だったのは、書道家の清藍さんや音楽家のシーナさん、福島県立博物館のみなさんの、児童生徒に対する温かく、熱い思いです。事前に来校され、児童生徒の様子や学校の設備を見学したり、ワークショップに参加する学級や学習グループの教員と打合せを行ったりして、児童生徒一人一人のことを知ろうとしたり、プロの視点からの活動のアイデアや児童生徒への思いを伝えてくださったりする姿勢に感銘を受けるとともに、教員として大変学ぶことが多くありました。また、一人一人が十分に活動できる数の道具をそろえたり、児童生徒が五感を使って書や音楽を感じ、それぞれの方法で味わうことができるような道具の準備や環境づくりをしたりと、入念に準備をしてくださいました。

そして迎えた当日。本校の児童生徒が、ワークショップのスタッフのみなさんと自然にやりとりをし、みんながキラキラとした表情で書や音楽の活動を楽しむ姿があふれていました。

福島県立博物館と連携し、学校外の方々と一緒に学習活動を考え実施することで、児童生徒の経験はもちろん、人との関わりも広がっていくことを強く実感しました。携わってくださったみなさんに心より感謝申し上げます。

令和4年度地域連携担当 佐藤 綾

# 音 楽 会

まつくら森の

福島県立会津支援学校小学部5年生が、講師の音楽家・シーナアキコさんと、VIVIWARE Cell というセンサーやモーターをプログラムで組み合わせてロボットや楽器を作るツールや、身の回りにある素材を楽器とし、思い思いの音を奏でました。音が重なる楽しさにあふれた素敵な時間を過ごしました。

## まっくら森は 『誰もがアーティストになれる場』

誰もが思いのままにアーティストになれる（表現できる）時間を作りたい！という想いから始まったのがこのワークショップでした。子ども対象のワークショップではありますが、見守る大人へのメッセージがたくさん込められているワークショップだと思います。子どもはいつだって自分らしく生きようとしています。支援学校の子どもたちは、多くの大人に囲まれて生活しているからこそ、見守る大人の意識が変わっていくことで、子どもたちもさらに本来の自分らしさのままいることが出来ます。こうした活動を続けていくことで、子どもたちの世界を一層自由に行けたらいいなあと思います。

シーナ アキコ



## シーナアキコ しーなあきこ

音楽家。ピアノ・マリンバ・ガラクタ演奏家。CMやTVなどの映像音楽制作の他、身近なさまざまな音色をサンプリングして音楽を作る特別授業や間伐材の楽器作りなど、大人も子どもも楽しめるワークショップをプロデュース。その傍ら府中市にて、関わるみんなで作っていく遊び場『あそびのアトリエ ズッコロッカ』を運営し、子どもたちと日々、ボーダレスな表現を模索している。



## “音楽”が体現した社会の未来像

長野 隆人（いわき芸術文化交流館 副館長 / 支配人）

ちょっと、なぞなぞのようだと思います。  
まず、「博物館」から「芸術文化交流館」に、「支援学校」で行う「音楽」プログラムづくりを手伝ってほしいと相談が来るって……。すごく嬉しいけど、割と真剣に悩みましたよ。  
やはり、音楽家が訪問して演奏を聴いてもらったり、一緒に歌を歌ったり、リズムに合わせて手拍子を取ったりするという、「ありがち」な体験では「ない」ほうがいいんだろうな。じゃあ、どんなもの？ 実験になってはいけない。提供者本位、おとな本位になってはいけない。子どもたちが楽しみながら、なにか根源的な体験にたどりつける場をつくる、ということか？ このなぞなぞを一緒に楽しめるアーティスト選定が、すべてのカギだと思いました。

迷わずシーナアキコさんに相談しました。シーナさんは、ピアノ、鍵盤ハーモニカなどの鍵盤楽器や、マリンバを始めとする打楽器全般は勿論、おもちゃや身近なガラクタも駆使して、音を紡ぎだし、楽器づくりのワークショップも行う。歌もうたう。作曲も、CM音楽から、身近な環境の音を重ねて楽曲を作ることまでお手のもの。編曲も映像制作も行う。活動拠点の東京では、子どもたちの「あそびのアトリエ」を、美術の先生と一緒に運営している。

いわば音楽とサウンドに関する「ひとり総合商社」、シーナさんそのものが「生きる音の博物館」というべき存在だからです。

小学部5年生を対象としたおよそ100分間のプログラム。“一期一会”の時間をどのように構成し、どのような質の経験をしてもらうか。シーナさんは、開催2ヵ月前に支援学校を下見し、先生方から児童ひとりひとりのお名前、身体的な特徴、好きなこと、苦手なことなどを細かく聴き取りながら、「こういったことならできますか？」「これはどうでしょう？」と矢継ぎ早に提案をし、想像力を膨らめていきました。

その際シーナさんが何度も連呼していた「VIVIWAREが！」というワード。

「手のひらに乗るサイズで」「ボタンがついてて」「光って」「こどもの動きに反応して」「1個1個こどもの特性に合わせてプログラミングができるから、子どもたちの体験が深まるはず！」と、そのツールの特色を力説すればするほど、それが「楽器」なのか「コンピュータ」なのか各々にイメージが膨らみすぎ、シーナさん以外の全員の目が点になっていくのが、笑えました。なぞなぞを解いている最中に来た、なぞなぞの倍返し。むむ。

そんななかシーナさん自身は確信に近いものを得て帰京、その後、そのなぞのツール（失礼！）VIVIWAREの開発者の皆さんに協力を要請し、ワークショップについて相当な回数の打ち合わせと、実現可能性に関する精査を重ねてくださったはず。そうして提案されたプログラムが、「まっくら森の音楽会」でした。

当日に行われたプログラムの具体的な様子は、次ページ以降の写真やレポートに詳しいですが、筆者が驚いた点をいくつか。

まず、会場が「正（ポジティブ）」と「負（ネガティブ）」の概念をとっぴらって、あらゆる感情を許容していこうという雰囲気満ちていた点。ここはアーティスト、教員、スタッフが申し合わせずとも自然にそういう意識で統一さ

れていたように思います。プログラムの導入部で、シーナさんは子どもたちに「音楽が好きかなひと？」と尋ねたあと、「あまり好きじゃないひと？」と訊くと「はいっ！」と勢いよく手を挙げる子が数名。いいねえ！と思った。こんな質問をするアーティスト、まずいない。初対面の子どもたちを相手にストレートに聞き、素直な反応を受け止めることから、ですね。その後、1階から2階に用意された「まっくら森」に足を踏み入れた瞬間、テンションの上だった子がほとんどでしたが、なかには「こわい」と小声で言う子もいました。でも、その児童が最終的には一番積極的に「まっくら森」の中の体験を満喫していたように見受けられました。「あまり好きじゃない」と挙手した子たちも、「好きじゃない」という佇まいでいることはなく、会場に仕込まれた「まっくら森」の住人としてあっという間に溶け込んでいきました。負に思えた要素は「音の世界」を触媒に、簡単に反転したと思いました。

「まっくら森」のなかには、シーナさんの出す生音もあったし、iPadも使ったし、楽器や会場の音をサンプリングしたBGMも流れていました。スタッフが木製のバードコールで鳴らす鳥の鳴き声もありました。もちろん見慣れた「楽

器」や、ガラクタ楽器も。子どもたちは、長いあいだ思い思いの“楽器”に手を伸ばし、聴覚だけでなく、視覚、触覚も駆使して、「音」「音楽」「音と連動する動き」に全身で反応していました。

福島チームにとって「なぞ」だったVIVIWAREの「楽器」でもあり、「ゲーム機」でもあり、「コンピュータ」でもあり、「おもちゃ」「あそび道具」でもある存在が、「こうあそんでほしい」という枠をはみだし、子どもたちの「あそび」を引き出していく。筆者のように当日そこに合流した関係者も、付き添いの先生たちの「声かけ」を見よう見まねで学びながら、ひとりひとりと向かい合い、音の出し方や、鳴った音に反応したあとのアクションをつなげていくのに夢中になりました。「弾き方」「叩き方」に正解のないものには、誰もが対等であることができ、そこから新しい「play」を探りあい、引き出しあい、味わいあい、喜びあうことで、心理的な距離感を縮めることができるのです。

我々おとなたちは「旋律」「リズム」「ハーモニー」を中心とした秩序ある音の配列を「音楽」と規定してしまうことが多いです。だからそれに基づく「成果」や「作品」「製品」を求めがちです（筆者のような人間は特に）。この日のこど

もたちは、シーナさんやVIVIWAREのスタッフ、先生方や博物館の職員の協働によりデザインされたプログラムによって、ふつうの「楽器」と、「日常用品」、それに「新しいテクノロジー」が当たり前のように生み出す、豊穡な「音の世界」を浴び、それに反応し、受け入れ、自らの感覚に忠実に、空間に身を置いて時間を過ごしました。感情を爆発させた。わかりやすくまとめられないけれど、とても豊かな世界だったことは確かです。

秩序ある音楽や、他人に自らを「あわせる」ことも時には必要です。でも、そこにある「音」に触発され、自らの感情がひらかれ、「こういう世界」があることを知り、「もっと」を求め、気持ちを走らせる。それこそが、学校という場にアーティストがおじゃますることによってお手伝いできることであり、責務ではないかと思いました。運営するスタッフ、先生方の意識も、プログラムを経験するなかで「この世界でよい」と、認識が変容したのではないかと思います。

アーティストのアーティストたる所以。それは、芸術や実演をとおして、「こうあるといいな」という価値観や「社会、未来のあり方」を提案し、頭で考えるよりも前に、自然と、感覚的な共感を生み出すことにあります。その意味で、シー

ナさんたちが今回提示した「まっくら森の音楽会」は、そこにいた子どもも、おとなも、年齢や立場を超えて、「音楽とはこうあらねばならぬ」「楽器とはこういうもの」から解放する取り組みでした。

「まっくら森」を抜けた先には、澄み切った自由な世界が広がっています。「未来」という壮大ななぞなぞに、これから支援学校の友だちと挑戦していきたいと思いました。





## まっくら森の音楽会

1月30日 月曜日

小学部5年生

福島県立会津支援学校大会議室・プレイルーム

講師 シーナアキコ

VIVIWARE Cell 講師 VIVIWARE 株式会社 山内佑輔、柏本和俊

VIVITA JAPAN 株式会社 小村陽子

今回のワークショップは、VIVIWARE Cell という触れたり、手をかざしたりすると音が鳴ったり、動いたりする機械やアプリを使って、踊ったり、祈ったり (!) しながら音を出して、会場全体で音楽をつくります。シーナさん、そしてVIVIWARE 株式会社の山内さん、柏本さん、VIVITA JAPAN 株式会社の小村さんが会津に来てくださいました。シーナさんをご紹介くださったいわきアリオスの長野さん、福島県文化振興課の山崎さん、福島県立博物館の鈴木館長も一緒にワークショップに参加します。



このワークショップの前日、シーナさんたちと支援学校の佐藤先生が2時間以上かけて準備をしてくださいました。シーナさんと山内さんたちが考えてくださった「楽器」を会場に並べました。支援学校との事前の打ち合わせで、子どもたちの得意なことや苦手なことを聞き取って、無理なく楽しみながら参加できるように考えてくださったものです。「楽器」はVIVIWARE Cell やアプリなどが使われていて、その中にはシーナさんたちが準備してくださった様々な音や動きが設定されています。例えば、キラキラのスパンコールがついたフワフワした触り心地の「魔法の杖」は、振るとシャラランと魔法のような音がします。他にも、振動を感知するように設定されたVIVIWARE Cell が取り付けられた「音楽の祭壇」は、祈りを込める振動が伝わると離れたところにある鈴が鳴ります。こうした「楽器」が8種類準備されました。



「楽器」だけでなく、「まっくら森」も準備します。非日常の空間を作り、初めて会う大人たちと同じ時間を過ごす緊張を和らげたいというシーナさんの意図から、当日は会場を少し暗くすることになりました。暗い中でも見える蛍光色の飾りをつけ、シーナさんのピアノのまわりには、たくさんの音が鳴るおもちゃや不思議なものを積みげます。電源が入ったVIVIWARE Cell の光と重なって、まっくら森ができあがりました。

VIVIWARE Cell に設定しておく音を、会場のバランスと考えるとこんな音がいいか、あんな音がいいかと思案していたシーナさん。いろいろなおもちゃを鳴らしたり、ピアノを弾いたりして悩んでいましたが、撤収の直前によく録音ができました。

当日は作り込んだ会場とは別の部屋でこれから何をするか説明をしてから「まっくら森」に移動することにしました。





いよいよ本番です。シーナさんは鍵盤ハーモニカを鳴らしながら子どもたちが待っている部屋に入り、今日の説明を始めます。持ってきた VIVIWARE Cell を少し触ってもらいながら、名前を呼びかけたりして気持ちをほぐしていきました。

「まっくら森」の会場に着くと、「楽器」の説明をします。説明が終わると、子どもたちは、好きな楽器を鳴らしたり、音楽を聴いたりします。散り散りに好きなところへ向かう子どもたち。どこに行こうか迷っている時は、大人が声をかけますが、無理に参加する必要はありません。疲れて寝転がっていても大丈夫です。iPad の画面上の星を動かして音を鳴らす「楽器」では、壁に画面を投影していましたが、壁の近くに立って自分の体に星を投影させ、自分なりに楽しみをつくり出す姿もありました。

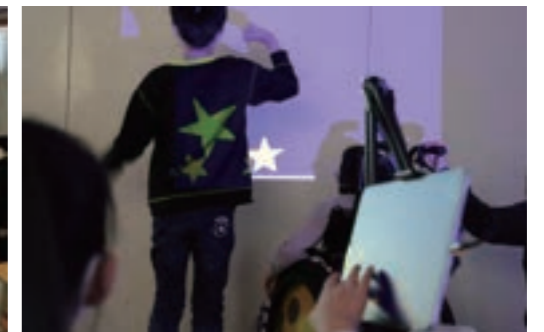
大人も子どもも一緒になってタイミングを合わせて音を鳴らしたりして、みんなが「楽器」に慣れてき

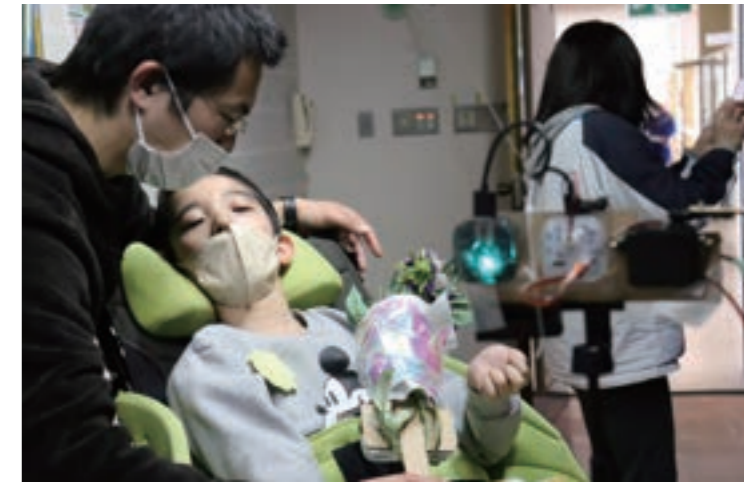
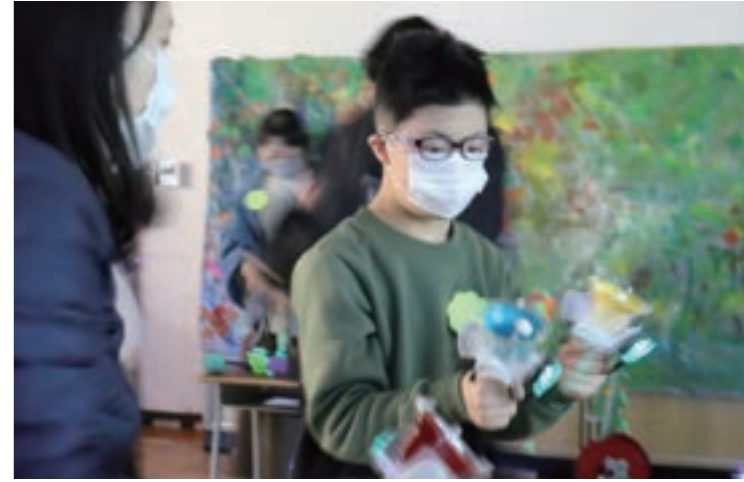
たころ、耳をふさぎながら会場を回っていた生徒さんが走り出しました。一緒にいた先生が「楽しいみたいです。普段は大きい音が苦手なんですけど」と教えてくれました。先生もとても嬉しそうな顔をしていました。

最後は、シーナさんの演奏で会場がひとつになりました。一番のお気に入りの楽器を発表して、終わりの挨拶をしました。

ワークショップ終了後、その日の感覚を忘れる前に、参加した大人たちで感想を共有し、それぞれが関わった子どもたちの姿を伝え合いました。鈴木館長は「今日、この場所に来られてよかった。」と振り返り、その場にいた全員の気持ちを言い表しているようでした。

江畑 芳









「普通の授業ではできないような学びをさせたい」「実態が違って、音楽ならみんなで楽しめるはず」そんな思いから申し込みをしました。具体的に話が進む中で、音楽家のシーナアキコさんが来てくださること、新しい機器を使って音楽をつくり出す経験ができることなどを知り、想像を超えた企画に感激を覚えるのと同時に、子どもたちがそれらを受け入れられなかったら…、機材を壊してしまったら…などの不安も生まれてきました。しかし、打ち合わせを重ねる中で、それらの不安は少しずつ解消され、そして当日、その不安は一気になくなりました。気が付くと子どもたち全員が「まっくら森の音楽会」の世界に入り、自分の思いを音で表現し、少しずつそれらが一つになっていました。音楽の偉大さを感じるとともに、シーナアキコさんをはじめ、VIVIWAREの皆さん、福島県立博物館の皆さん、ワークショップに関わってくださった全ての皆さんが子どもたちを思い、子どもたちが楽しめるものを…と考えて下さった結果だと感じました。学校だけでは成し得ないことも、地域と連携することで「できる」ということを実感しました。子どもたちに素晴らしい体験と学びを提供していただき、本当にありがとうございました。

小学部 木鋤 美幸

感<sup>じ</sup>る漢字  
+  
音<sup>ま</sup>つ<sup>く</sup>ら<sup>森</sup>の<sup>音</sup>楽<sup>会</sup>

成果展

+会津支援学校と福島県博の 2022年度

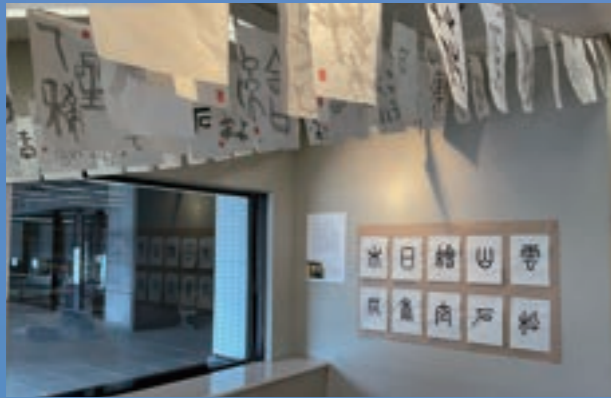


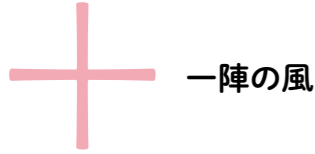
感じる漢字+まっくら森の音楽会 成果展  
+会津支援学校と福島県博の2022年度

会期：2023年2月28日（火）～3月11日（土）  
会場：福島県立博物館体験学習室

福島県立会津支援学校と行った二つのワークショップ「感じる漢字」と「まっくら森の音楽会」の成果を作品とワークショップの様子を伝える映像作品でご紹介しました。会期中には、福島県立博物館が行っている「三の丸からプロジェクト」の一環で離れたところからもパソコンで操作できるテレプレゼンスロボットを使った遠隔観覧を行い、ワークショップに参加した小学部5年生が学校にいながら展示を観覧してくれました。







加藤 香洋（福島県立会津支援学校 校長）

本校は、地域とつながり自分らしく生きる児童生徒の育成を目指し、「地域との連携・協働」を学校経営・運営ビジョンの柱の一つに掲げています。

そのため、地元企業や関係機関などの地域資源を活用して教育活動の充実に努めていますが、福島県立博物館には令和2年度から授業づくりのスーパーバイザーとして、また教員のエスコート・ランナーとして、その専門性と機動力を本校の教育活動に惜しみなく提供していただいています。令和4年度には「福島芸術計画」の2つのワークショップのほか、総合的な学習（探究）の時間や学校行事などにも幅広く御協力いただきました。

これらの協働をとおして、福島県立博物館は本校にとって「一陣の風」であることを強く感じています。学校に清冽な空気を吹き込むだけでなく、時に私たちを巻き込むつむじ風となって心を揺さぶり、やがて上昇気流となって子どもたちを新しい世界に運んでくれました。さらに本校を帆船とするならば、教育活動という航路

を進めるために、「一陣の風」は大きな推進力をもつ追い風となったことは間違いありません。

本校の子どもたちは障がいのためにさまざまな制約がありますが、福島県立博物館との協働授業では、わくわくする体験だけでなく自分でできることをたくさん見つけることができました。また、館長はじめ皆さんとの関わりをとおして、他者と共感することや自分を表現することの喜びを知ることができました。

地域のヒトとモノが集うだけでなく、過去の英知を現在に伝え、新しい価値を未来につなぐ福島県立博物館には、本校としても大きな期待をしています。生涯を通じて文化芸術活動に親しみ、豊かな生活を営む生涯教育の基盤を作る上で、福島県立博物館との協働は本校にとって欠くことができないものです。「誰もが、障がいの有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会」の実現は、こうした取組の先にこそあると思っています。

令和4年度アートによる新生ふくしま交流事業  
アートで広げる子どもの未来プロジェクト 福島芸術計画 2022

## 感じる漢字

ワークショップ講師：千葉清藍（書道家）

## まっくら森の音楽会

ワークショップ講師：シーナアキコ（音楽家）

VIVIWARE Cell 講師：VIVIWARE 株式会社 山内佑輔、柏本和俊  
VIVITA JAPAN 株式会社 小村陽子

講師補助：江畑芳

成果展：会期 2023年2月28日（火）～3月11日（土）  
会場 福島県立博物館体験学習室

主催：福島県  
協力：福島県立会津支援学校、いわき芸術文化交流館（いわきアリオス）  
VIVIWARE 株式会社、VIVITA JAPAN 株式会社

企画運営：小林めぐみ（福島県立博物館）、西尾祥子（福島県立博物館）  
川延安直（福島県立博物館）

事業受託者：認定特定非営利活動法人ドリームサポート 福島

## 感じる漢字+まっくら森の音楽会記録集

テキスト：川延安直  
長野隆人（いわき芸術文化交流館）  
撮影：川延安直、小林めぐみ、江畑芳  
画像提供：福島民報社（42p 下段右）  
編集：小林めぐみ、西尾祥子、川延安直  
デザイン：江畑芳

発行：福島県

8-9p、12-13p、16-19pの墨流し作品は「いわきの水と墨で福島の紙にもようをつけよう！～夏井川の水で墨流し～」(講師：千葉清藍、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト2015)でいわき市立好間第一小学校の児童のみなさんが制作したものです。

この事業は、国内外からお寄せいただいた寄附金をもとに造成された「福島県東日本大震災子ども支援基金」により実施しています。



